569-142
1200501517406
569
68
142

改造文庫

第二部 第六十八篇

作曲白秋國民歌謠集

北原白秋著

改造社出版

401

改造文庫

第二部 第六十八篇

作曲白秋國民歌謠集

北原白秋著

改造社出版

納本

 569-142

序

わたくしの常に思ふことは、民族としての日本人の聲である。かうした國民の歌謠は必ず興らねばならぬのである。かの新らしい民謠童謠以外に、わたくしは幾多の國民歌謠を作つた。此の集には此の種の歌謠を收錄した。この中、二三を除けば他は既に作曲されて、普く國民の間に合唱され、レコードにも吹き込まれてある。

もとより、團歌や校歌のごときは、わたくしとしては第二義の詩作ではあるが、それらの依囑を受けても、わたくしが敢て之を辭さなかつた理由は、さうしたものにも詩人の息吹を遍滿さすがいいと思つたからである。二つには精神上の深切を念ずるからである。

なほ『生活讃歌』の中の「空は青雲」「輝く朝」のごとき新民謠體は、これまでの純粹の民謠、或は鄉土民謠とはまた別種のものであつて、おそらく今後のわたくし自身の歌謠風景を更に爽快に展開さしてくれるであらう。

わたくしは勇躍してゐる。

昭和四年夏　　白秋

作曲 白秋國民歌謠集 目次

頌歌・挽歌

國民の歌……九
明治天皇頌歌……一一
明治神宮奉納獅子舞歌……一四
建國歌……一八
讃へまつれよ、和宮……二一
大正天皇奉悼曲……二三
昭和の黎明……二四
明治節の歌……二七
昭和の日本……三〇
秩父宮頌歌……三三
秩父の宮さま……三五
我等が宮……三八
言祝……四一

團歌・會歌・町歌

山の唄……四五
空は青雲……四八
還れよ、童に……五〇
世界の子供……五三
交通の歌……五六
玄海の波は荒くも……五九
愛せよ網干を……六二
わかき松江……六五
咲けよ我等が齒科醫學……六七

目次

校歌

山は大阿蘇……七三
鐘が鳴る鳴る……七六
校旗は燦たり……七九
大なり北海……八一
見よ參臺の……八三
藥學華咲け……八六
月の輪原頭……八九
櫻と樫……九一
愛の花輪……九三
水きよき野田……九五
法鼓ひびく……九七

生活讃歌

父母の歌……一〇三
少女の歌……一〇五
幼年の歌……一〇七
少年の歌……一一〇
輝く朝……一一三
感謝の朝夕……一二〇
希望の海……一二三
朝日はのぼる……一二四
日本は勝ちたり……一二七
平凡人の歌……一二九
空中行進曲……一三一

頌歌・挽歌

國民の歌

山田耕作作曲

1

讃めよ、歌へよ、我が大御代を、
仰げ、崇めよ、天皇を。
おお、崇めよ、天皇を。
彌榮、彌榮、彌榮えあれや。

2

讃めよ、歌へよ、我が大皇子を、
誇れ、よろこべ、わかき光を。
おお、よろこべ、わかき光を。
彌榮、彌榮、彌榮えあれや。

3

讃めよ、歌へよ、我が國柄を、
承けよ、傳へよ、うまし山川。
　おお、傳へよ、うまし山川。
　彌榮、彌榮、彌榮えあれや。

4

讃めよ、歌へよ、我が青空を、
統べよ、惠めよ、海の果まで。
　おお、惠めよ、海の果まで。
　彌榮、彌榮、彌榮えあれや。

5

讃めよ、歌へよ、我が日の本を、
奮へ、幸あれ、われら國民。
　おお、幸あれ、われら國民。
　彌榮、彌榮、彌榮えあれや。

大正一三

明治天皇頌歌

山田耕作作曲

大空の窮みなき道、わが日の本の、
天皇の神ながら知ろしめす道。
故こそ畏き大御心。
　仰げや、國民、
　崇めや、諸人、

われらが明治の大き帝を。

2

いや古く、いよよ新に、現人神と、
天津日繼の躬みづから祭り統べさす。
故こそまことの君の聖業。
　仰げや、國民、
　崇めや、諸人、
　われらが明治の大き帝を。

3

東へ都遷させ、日と輝かに、
萬づ布かせし大詔典、民を一つと。
故こそ圓けき國の相。

　仰げや、國民、
　崇めや、諸人、
　われらが明治の大き帝を。

4

まつろはぬ、稜威のまにまにうち平けて、
四方を和すと高領るや恩澤うるほふ。
故こそ正しき大御軍。
　仰げや、國民、
　崇めや、諸人、
　われらが明治の大き帝を。

5

代々木野の林隠りに神さびますと、

神の宮居の千木高く鎭め護らす。
故こそい照らす天の八隅。
　仰げや、國民、
　崇めや、諸人、
　われらが明治の大き帝を。

大正一四・一〇・二八

明治神宮奉納獅子舞歌

1

ここの御苑に見申せば、
朝日さし照る宮づくり、
黄金かがやく、千木高く。
　獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

2

歌ひはやせや、大御代を、
天津日嗣を、皇孫を、
さきの帝の大前に。
　獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

3

笛や皷の音も空に、
たたへまつれや神業を、
四方に棚引く旗雲に。
　獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

4

舞へや、勇めや、日の本は、
窟戸神樂の浮け遊び、
ほがらほがらで夜も明けた。
　獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

5

さても白妙、見わたせば、
富士は鎮めの國のやま、
遠つ神代の雪のいろ。
　獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

6

ここは代々木の神宮、
畏れながらにまゐり來て、

ささら拍子もにぎやかや。
　獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

7

廻れ廻れや、ささら舞、
納めまつれば菊の香や、
玉の眞砂をつらつらと。
　獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

8

廻れ廻れや、ささら舞、
舞へや、勇めや、かがやかや、
大御寶や、わがどちや。
　獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

大正一四・一一

建國歌

山田耕作作曲

1

そのかみ、天つち闢けし初め、
げに萌えあがる、葦牙なして、
立たし神こそ、
國の常立。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
かの若々し神の業を。

2

惟ふに日靈の大御神の、

げに言因し賜へる御詔、
知らせよ、皇孫、
三つの寶と。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
豐葦原の中つ國を。

3

神武の御代こそ荒ぶる和し、
げに現神、宮太敷きて、
初めて築かせし、
國の礎。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、

神ながらなる崇き道を。

4

爾にぞ、明治の大き帝。
げに晴れわたる、青高空と、
更にし照らさす、
四方に八隅に。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
わが彌榮の日の出る國を。

5

依り會ふ天地きはみ知らず、
げに天皇の稜威盡きず、

誇れよ、國民、
われら榮あり。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
ただひたむきの日本魂を。

大正一五・一・一四

讃へまつれよ、和宮

静寛院宮奉讃唱歌　　本居長世作曲

1

讃へまつれよ、和宮、
國の爲には荒草の、
露と消ゆとも惜しまじと、

ああ、東路へ、姫の輿。

2

讃へまつれよ、和宮、
脊にはつかへて、刈薦の、
亂れににほふ菊の香や、
ああ、日の本の、妹の道。

3

讃へまつれよ、和宮、
誰か支へむ三つ葵、
民よあはれと、いとせめて、
ああ、身ひとつを、尼の宮。

4

讃へまつれよ、和宮、
清くみじかきみ命の、
光は悲し、雲のうへ、
ああ、嶺の月、二日月。

大正一四・九・二一

註　靜寛院奉讃會の爲に作る。靜寛院は和宮または二日様とも申し上げる。

大正天皇奉悼曲

冷えとほる白き鳥
翼うち飛ばず。

凍みこほる白き華
今朝現なし。
十善のみくらゐに
君はおはすを。
またいつかみそなはす
冬の日の白き花鳥圖。

昭和の黎明

昭和二・一・二五

山田耕作作曲

1

黎明來れり、

凜たる黎明、
げにげに日の御子、
光り立たせり。
萬歳、萬歳、萬歳。

2

仰げよ、青雲、
新らし、ふたたび、
われらが大君、
若くいませり。
萬歳、萬歳、萬歳。

3

世界よ、輝け、

崇き稜威に、
滿ち滿て、ひとつに、
國は和したり。
　萬歳、萬歳、萬歳。

4

昭和の御代こそ、
榮あれ、いよいよ。
げにげに若きは、
光る空なり。
　萬歳、萬歳、萬歳。

5

仰げよ、讚へよ、

凜たる黎明。
われらが大君、
若くいませり。
　萬歳、萬歳、萬歳。

明治節の歌

昭和二・一・九

山田耕作作曲

1

蒼空のごとき大君、
日のごとく崇き天皇、
明治の帝にあつまれ、ひとしく、
興れり、日の本、光あまねし。
祝へよ、仰げよ、けふのよき日を、

よき日を、よき日を、
十一月三日、この日。

2

神ながらしろしめす國、
地はさかえ、稜威滿ち滿つ。
明治の帝にかへれよ、あらたに、
道あり、東に、光あまねし。
祝へよ、仰げよ、けふのよき日を、
よき日を、よき日を、
十一月三日、この日。

3

大君のなかの大君、

かがやきのなかのかがやき、
明治の帝にうるほへ、國々、
後あり、日の本、光あまねし。
祝へよ、仰げよ、けふのよき日を、
よき日を、よき日を、
十一月三日、この日。

4

人の世の聖、この君、
大御歌崇き天皇、
明治の帝にぬかづけ、すがしく、
妙なり、菊の香、光あまねし。
祝へよ、仰げよ、けふのよき日を、
よき日を、よき日を、

十一月三日、この日。

昭和二・九・五

昭和の日本

1

轟け、青雲、
東はしらんだ。
聞け、聞け、はや呼ぶ
日本のこの聲。
　春がきた、春が、春が、
　緑の夜明けが。
　昭和だ、昭和だ、
　我等が時代だ。

2

高鳴れ、新潮、
光はつんざく。
聞け、聞け、うづまく
日本のこの聲。
　春がきた、春が、春が、
　萠えたつ夜明けが。
　昭和だ、昭和だ、
　我等が時代だ。

3

集れ、星座よ、
草木はひびいた、

聞け、聞け、どよもす
日本のこの聲。
春がきた、春が、春が、
茜の夜明けが。
昭和だ、昭和だ、
我等が時代だ。

4

若やげ、太陽、
世界は手擧げた。
聞け、聞け、滿ち滿つ
日本のこの聲。
春がきた、春が、春が、
輝く夜明けが。

昭和だ、昭和だ、
我等が時代だ。

昭和二・一二・二四

秩父宮頌歌

山田耕作作曲

1

ちちぶの山の山水と、
さやけき君こそ御代の柱よ。
まさしく國の秀、都ちかく、
そびえて空に新なる君。
頌ぎまつれ、御名の秩父を、御名の秩父を。
仰ぎまつれよ。

2

ををしく健く朗らけく、
ますらを君こそ日本をぐなよ。
まさしく立たせり、眉根わかく、
そびえて常に新なる君。
頌ぎまつれ、御名の秩父を、御名の秩父を。
仰ぎまつれよ。

3

天つ足る日に添ひませば、
ゆゆしき君こそ御代の守りよ、
まさしく安けし、われらとともに、
そびえて高く、新なる君。

頌ぎまつれ、御名の秩父を、御名の秩父を。
仰ぎまつれよ。

4

み榮あれよ、直の宮、
背の宮、君こそ風よ光よ。
まさしく靡かす草も木々も、
そびえて永久に新なる君。
頌ぎまつれ、御名の秩父を、御名の秩父を、
仰ぎまつれよ。

秩父の宮さま

童謠

昭和三・三・四

山田耕作作曲

1

日本アルプス槍ヶ嶽、槍ヶ嶽、
雪のお山に、お山に、お山に、
たららる、らっら、おのぼりなるよ。
リユックサックしよつて、ステッキついて、
登山の宮様、秩父の宮さま、
みんなの宮さま、たららる、らっ。

2

霧のテントに藁の床、藁の床、
星の光に、光に、光に、
たららる、らっら、おやすみなるよ。
背嚢とつて、夜露にぬれて、

スポーツの宮さま、秩父の宮さま、
みんなの宮さま、たららる、らっ。

3

つよい兵隊、三聯隊、三聯隊、
赤い軍帽で、軍帽で、軍帽で、
たららる、らっら、おすすみなるよ、
指揮刀振つて、眞っ先かけて、
士官の宮さま、秩父の宮さま、
みんなの宮さま、たららる、らっ。

4

いつもお氣がる、御所のまへ、御所のまへ、
チカリおめがね、おめがね、おめがね、

たらら る、らっら、おとほりなるよ。
はやいおみあし、お手々をあげて、
僕らの宮さま、秩父の宮さま、
みんなの宮さま、たららる、らっ。

昭和三・三月

我等が宮

秩父宮御成婚奉祝歌　山田耕作作曲

1

我等が宮の御名に添ふ、
秩父の山の朝ぼらけ、
雲こそにほへ、妻ごめに。
　祝へ、神々、
言祝げ、國民。

　拍手うてや。

2

山川の瀬は鳴りとよみ、
よき妃の宮をほぎまつる。
ゆづ盤村と常久に。
　祝へ、神々、
言祝げ、國民。
　拍手うてや。

3

仰げよ、高くとりよろふ
山の眞洞の雪の彩、
日に茜さす、神ながら。

祝へ、神々、
言祝げ、國民。
拍手うてや。

4

げに大君の直の宮、
雄々しく健き背の御手が
今こそ執らす妹の御手。
祝へ、神々、
言祝げ、國民。
拍手うてや。

昭和三・九・一八

言祝

御大禮奉祝詩篇

大君、
日の本の若き大君、
神ながら朗らけき現人神、
青空やかぎりなき、
國土やゆるぎなき、
萬世の皇統、
皇孫や天津日繼、
ああ、我が天皇、
大君、
道の大君、
大稜威、

今こそは依り立たせ、
けふこそは照り立たせ、
高御座輝き滿つ、
日の御座ただ照り滿つ、
御劍や御光添ひ、
御璽やいや榮えに、
數多の御鏡や勾玉や、
さやさやし御茵や照り足らはせ。
大君、
我が大君、
現つ神、
神ゆゑに雲の上の生日の光
采りてますかも。

昭和三・一〇

團歌・會歌・町歌

山の唄

中山晋平作曲

1

守れ、權現、夜明けよ、霧よ、
山は命の禊場所。
行けよ、荒くれ、どんどと登れ、
夏は男の度胸だめし。

2

何を奥山、道こそなけれ、
水も流るる、鳥も啼く。
馬子は追分、山樵は木遣、
朝は裾野の放し駒。

3

風よ、吹け吹け、笠吹き飛ばせ、
笠は紅緒の荒むすび。
雨よ、降れ降れ、ざんざとかかれ、
肩の着茣蓙も伊達ぢやない。

4

山は百萬石、木萱の波よ、
木萱越ゆればお花畑、
雪の御殿に氷の巖窟、
瀧は千丈の逆おとし。

5

さあさ、火を焚け、ごろりとままよ、
木の根枕に嶺の月。
夢にや鈴蘭、谷間の小百合、
酒のさかなにや山鯨。

6

守れ、權現、鎭まれ、山よ、
山は男の禊場所。
雲か空かと眺めた峰も、
今ぢや、わしらが眠り床。

大正八・六

註　慶應山岳會のために作つた民謠體登山歌である。

空は青雲

全國青年團民謠

山田耕作作曲

1

空は青雲、わしらは若い、
岩に子鷹の仰ぐよだ。
さうだ〱、巣立ちの若鷹だ、
いまに風切る鷹の羽だ。

2

海ははるばる、わしらは若い、
波に快走船の搖れるよだ。
さうだ〱、南の風待ちだ、
いまに乘り越す波の穗だ。

3

古い國柄、わしらは若い、
山と川とは搖籠だ。
さうだ〱、生れの生えぬきだ、
いまにお國の後繼だ。

4

時はよい秋、わしらは若い、
若い日本の起つ秋だ。
さうだ〱、世界のしののめだ、
いまにかがやく朝燒だ。

5

何が辛かろ、わしらは若い、
心だてなら玉のよだ。
　さうだ〳〵、鋼鐵のひびくよだ、
　地から噴き出す眞清水だ。

6

伸びろ、耐へろ、わしらは若い、
いづれ柱になる木だ。
　さうだ〳〵、見てゐろ、これからだ、
　いまにお國を背負ふ木だ。

大正一二・一二・一二

還れよ、童に

更生團の歌

1

還れよ、童に、
穉け、をさなく、
目ざめよ、手あげよ、
守るは神なり。
　更生團、更生團、更生團立てり。

2

還れよ、誠に、
貫ぬけ、眞ごころ、
目ざめよ、奮へよ、
唯一の道なり。
　更生團、更生團、更生團立てり。

3

還れよ、その根に、
尊とめ、命を、
目ざめよ、愛せよ、
人みな善なり。
　更生國、更生國、更生國立てり。

4

還れよ、光に、
悲しめ、世の惡、
目ざめよ、降せよ、
淸きは勝なり。
　更生國、更生國、更生國立てり。

5

還れよ、この地に、
立て立て、日のもと、
目ざめよ、仰げよ、
青空晴れたり。
　更生國、更生國、更生國立てり。

大正一五・二・七

世界の子供

童謠　　本居長世作曲

1

子供なんだ、子供なんだ、われわれは、
世界の子供だ、みな遊ばう。

大きなお日さん、あを空だ。
見ろ、見ろ、明るいあを空だ。

2

子供なんだ、子供なんだ、われわれは、
世界の子供だ、よく伸びよう。
どこでもかがやく地のうへだ。
立て、立て、緑の地のうへだ。

3

子供なんだ、子供なんだ、われわれは、
世界の子供だ、手をつながう。
誰でも善い子だ、輪になつた。
來い、來い、國々、輪になつた。

4

子供なんだ、子供なんだ、われわれは、
世界の子供だ、愛しよね。
日本の子供が叫ぶんだ。
やめ、やめ、戰を、失くすんだ。

5

子供なんだ、子供なんだ、われわれは、
世界の子供だ、みな歌はう。
世界はよくなる、ほんとにだ。
見ろ見ろ、よくなる、ほんとにだ。

大正一五・一一・四

註　國際聯盟協會の童謠として作したものである。

交通の歌

童謠　　山田耕作作曲

序歌

鳴らせ鳴らせ、鐘を。子供よ、鐘を、
子供のために、安全デーの鐘を。
　らんらんらん、ちん、ごん、がん、
安全デーの鐘を。

1

道をあるけ、子供、道を。歩道を、道を、
かならず、子供、左のはしを。
　らんらんらん、ちん、ごん、がん、
左のはしを。

2

交叉點や車道、越すなよ、ななめ、
横ぎれ、いつも、直角にとほれ。
　らんらんらん、ちん、ごん、がん、
直角にとほれ。

3

自動車や電車、間を見よ、待てよ、
停つても、すぐと、前や後切るな。
　らんらんらん、ちん、ごん、がん、
前や後切るな。

4

つくな、寄るな、荷馬車、飛び降り飛び乘りするな。
街角、小角、駈け出すな、駈けな。
　らんらんらん、ちん、ごん、がん、
駈け出すな、駈けな。

5

人立ちや、物見、たかるな、前へ、
お手々んつなぎ、とほせんぼよ、じやまよ。
　らんらんらん、ちん、ごん、がん、
とほせんぼよ、じやまよ。

6

三輪車や、スケーター、遊ぶな、道で。
人どほりおほい、ほら來た、お馬。

　らんらんらん、ちん、ごん、がん、
ほら來た、お馬。

（復唱）

鳴らせ鳴らせ、鐘を、子供よ、鐘を、
子供のために、安全デーの鐘を。
　らんらんらん、ちん、ごん、がん、
安全デーの鐘を。

註 日本交通協會のために

大正三・三・一三

玄海の波は荒くも

福岡縣聯合青年團團歌

山田耕作作曲

1

玄海の波は荒くも、

青年團、青年團、
誓へ、日本の橋と、いよよいよよ、
君國のために盡せや、
新人の未來持てや。
フレー、フレー、フレー。

2

英彥の嶺は峨々たり、
青年團、青年團、
興せ、正義の道高く、常に常に、
共存のために和せよや、
鍊鐵の響たれや、
フレー、フレー、フレー、フレー、

3

黑煙は空に漲る、
青年團、青年團、
穿て、理想の礦脈を、強く強く、
人生のために生きよや、
ハンマーの力たれや。
フレー、フレー、フレー、フレー。

4

洋々たる筑紫次郎ぞ、
青年團、青年團、
圖れ、日夜の進展を、長く長く、
同胞のために勤けや、

平原の光たれや。
フレー、フレー、フレー。

5

不知火の海の如かれ。
青年團、青年團、
努め、不斷の生活を、廣く廣く、
愛郷のために燃えよや、
有明の風となれや。
フレー、フレー、フレー、フレー。

昭和三・一〇・二四

愛せよ網干を

岡山縣網干町歌

山田耕作作曲

1

愛せよ、網干を、
我等が網干を。
育てり、我等は海を前に、
（美し家島よ、沖の雲よ。）
ほこれよ、播磨のこの町、この空。

2

愛せよ網干を、
我等が網干を。
承けたり、我等は父祖の土地を、
（美し家島よ、沖の雲よ。）
ほこれよ、住みつぐこの町、この空。

3

愛せよ網干を、
我等が網干を。
光れり、昔も國士出でて、
(美し家島よ、沖の雲よ、)
ほこれよ、榮ある、この町、この空。

4

愛せよ網干を、
我等が網干を。
勢へり、この土、煙高く、
(美し家島よ、沖の雲よ、)
ほこれよ、新のこの町、この空。

5

愛せよ網干を、
我等が網干を。
和したり、我等は海を前に、
(美し家島よ、沖の雲よ、)
ほこれよ、かゞやくこの町、この空。

昭和三・一〇・二四

わかき松江

千葉縣松江町歌

山田耕作作曲

1

眞近し青空、まさに起つべし、
誓つて創らむ、理想の自治體、

運河は到れり、野に水明れり、
我等がこの町、人は和したり。
輝け新都市、起てよ松江、
松江、松江、わかき松江。

2

か廣し葛飾、共に爲すべし、
感謝し祈らむ、自給の生活、
疏菜はかをれり、野に聲あがれり、
我等がこの町、時は惠めり。
輝け新都市、起てよ松江、
松江、松江、わかき松江。

3

遙けし富士の嶺、期して待つべし、
さやけく望まむ、未來の光芒、
新人きそへり、野に道開けり、
我等がこの町、いよよ興れり。
輝け新都市、起てよ松江、
松江、松江、わかき松江。

昭和四・二・二三

咲けよ我等が齒科醫學

福岡縣齒科醫師會會歌

山田耕作作曲

1

光りかゞやく新世紀、
時は和めり、明らかに、
咲けよ、我等が齒科醫學、

にほへ、筑紫の青ぞらに。
　濟せよ、仁、
　つくせ、國手よ、つゝましく。

2

ありし神代の白日別、
國はいや古る山河と、
咲けよ我等が齒科醫學、
にほへ、筑紫のこの土に。
　承けよ、道、
　まもれ、命をおごそかに。

3

忍べ、國士の殉難史、

父祖は起ちたり、ことごとく、
咲けよ、我等が齒科醫學、
にほへ、筑紫の野に丘に。
　憂へ、世を、
　さゝげ、この身を美はしく。

4

海の不知火、日の惠み、
常に豐けし、うららかに。
咲けよ、我等が齒科醫學、
にほへ、筑紫の礦脈に。
　保て、愛、
　つつめ、霞とあたゝかく。
（繰返へし）

校歌

光りかゞやく新世紀、
時は和めり、明らかに、
咲けよ、我等が齒科醫學、
にほへ、筑紫の青ぞらに。
　濟せよ、仁、
つくせ、國手よ、つゝましく。

昭和四・二・21

山は大阿蘇

熊本醫科大學豫科校歌

山田耕作作曲

1

山は大阿蘇、烟は絶えず、
河は白川、流は盡きず。
醫もまた道なり、
畏し、とこしへ。
　ラッショ、豫科、
　ラッショ〳〵、熊本、
　ラッショ〳〵〳〵、我等。

2

森の都は常盤に青く、
草は九品寺白露しげし。
醫はこれ濟生、
うるほせ、とこしへ。
ラッショ、豫科、
ラッショ〳〵、熊本、
ラッショ〳〵〳〵、我等。

3

メスを執りては虔みふかく、
床に臨みて愁ふる篤し。
醫はげに愛なり、
窮めよ、とこしへ。
ラッショ、豫科、

ラッショ〳〵、熊本、
ラッショ〳〵〳〵、我等。

4

朝は夕はみ空を仰ぎ、
愛し命を地に看て護る。
げにげに醫は道、
光れよ、とこしへ。
ラッショ、豫科、
ラッショ〳〵、熊本、
ラッショ〳〵〳〵、我等。

大正一四・一二・二

鐘が鳴る鳴る

新潟縣高尾小學校校歌

弘田龍太郎作曲

(鐘が鳴る鳴る、空高く、
かがやけ、高尾、高尾校)

蓑帽子かぶつて、
伏岳山、
ふれふれ、雪よとみんなは通ふ。
(鐘が鳴る鳴る、空高く、
かがやけ、高尾、高尾校。)

氷が溶けたぞ、
川や溜池、
咲け咲け、花よとみんなは通ふ。
(鐘が鳴る鳴る、空高く、
かがやけ、高尾、高尾校。)

畔にはすかんぽ、
田植どき、
吹け吹け、風よとみんなは通ふ。
(鐘が鳴る鳴る、空高く、
かがやけ、高尾、高尾校。)

白峰が晴れます、
栗が笑む、
鳴け鳴け、鳥よとみんなは通ふ。
（鐘が鳴る鳴る、空高く、
かがやけ、高尾、高尾校。）
學べや鍛へや、
磨け、皆、
日に日に伸びよとみんなは通ふ。
（鐘が鳴る鳴る、空高く、
かがやけ、高尾、高尾校。）

大正一四・一二・四

校旗は燦たり

東京齒科醫學專門學校校歌

山田耕作作曲

1

校旗は燦たり、風ひるがへれり、
我等が志望は炎と騰れり、
起て、起て、今こそ我が師に見えむ。
醫はこれ濟生、ひとへに仁なり、
國手の精神、窮理の治法、
擧りて磨かむ。――未來は響けり。

2

校旗は燦たり、風ひるがへれり。

私學の苦節は嚴たり、徹れり、
見よ見よ、今こそ我が師を讃へむ。
　醫はこれ濟生、ひとへに仁なり、
　帝都の我が齒科、巍々たる我が校、
　秋なり、叫ばむ。——光は來れり。

3

校旗は燦たり、風ひるがへれり。
父なり、友なり、全き家なり、
來よ來よ、今こそ我が師を繞らむ。
　醫はこれ濟生、ひとへに仁なり、
　感謝の氾濫、英氣のとどろき、
　日に夜に祈らむ。——人なり、道なり。

白秋國民歌謠集

4

校旗は燦たり、風ひるがへれり。
水道橋畔、日は照りわたれり、
起て起て、今こそ我が師と護らむ。
　醫はこれ濟生、ひとへに仁なり、
　無限のこの道、かなたの蒼空、
　擧りて仰がむ。——飛躍の朝なり。

昭和二・九・二九

大なり北海

室蘭中學校校歌

山田耕作作曲

1

日よ、照り輝け、晴れたり、青空、
　我等は集へり、集へり、集へり、
　室蘭中學、輝け、我が校、
大なり、北海、アイヌモシリ、
野に滿つ鈴蘭、その香高し。

2

綠よ、輝け、晴れたり、有珠岳、
　我等は學べり、學べり、學べり、
　室蘭中學、輝け、我が校、
質實剛健、朝に夕に、
培ふ校風、その香高し。

3

潮よ輝け、晴れたり、白鳥、
　我等は勢へり、勢へり、勢へり、
　室蘭中學、輝け、我が校、
希望ははてなし、若く若く、
とどろく波の穗、その香高し。

昭和三・一〇・二四

註　アイヌモシリ(蝦夷島)、アイヌ語なり。白鳥、灣の名。

見よ參臺の

駒込中學校校歌

山田耕作作曲

1

見よ、參臺の星かげ高く、
地に玉蘭の香は淸々し。

思へよ、わが友、一にこの德。
　我等、我等、我等、
　駒込中學——光清し。

2

此所、千駄木の林は高く、
目に秀麗の富士が嶺清し。
修めよ、わが友、更にこの道。
　我等、我等、我等、
　駒込中學——心正し。

3

それ、城北の青空高く、
世に教學の流れは清し。

白秋國民歌謠集

護れよ、わが友、切にこの國。
　我等、我等、我等、
　駒込中學——基固し。

4

見よ、參臺の星かげ高く、
地に玉蘭の香は清々し。
光れよ、わが友、眞にこの德。
　我等、我等、我等、
　駒込中學——意氣は強し。

昭和三・一〇・二六

藥學華咲け

東京藥學專門學校校歌

山田耕作作曲

1

藥學華咲け、
華咲け、正しく。
綠の柏木輝きにほへり。
新らし、この空、かをれよ、この風、
母校よ、我等が歌はあがれり。
我等が、我等が歌はあがれり。
T.P.C. T.P.C. T.P.C. フレー。

2

新人爲すべし、
爲すべし、正しく。
科學の窮理は自然を生かさむ。
美し、この土、かをれよ、この道、
我が師よ、我等が明日は光れり。
我等が、我等が明日は光れり。
T.P.C. T.P.C. T.P.C. フレー。

3

靈智よ、徹れよ、
徹れよ、正しく。
貴き命はこの手に賴れり。
虔まし、この學、かをれよ、この校、
世界よ、我等が愛は切なり。

我等が我等が愛は切なり。
T.P.C. T.P.C. T.P.C. フレー。

4

藥學華咲け、
華咲け、正しく。
東海雪あり、眞白し、不二の嶺、
眞近し、この空、かをれよ、この朝、
母校よ、我等が意氣はあがれり。
我等が、我等が意氣はあがれり。
T.P.C. T.P.C. T.P.C. T.P.C. フレー。

昭和三・一一

月の輪原頭

山田耕作作曲

大谷中學校校歌

1

光よ、來れ、月の輪原頭、
母校は大谷、今熊野、
　お、大谷、お、大谷、お、大谷、フレー。
げに法燈のかがやき盡きず、
眞俗二諦のこの教。
見よや、見よや。

2

光よ、來れ、他力の門に、

母校は大谷、今熊野、
　お、大谷、お、大谷、お、大谷、フレー。
げに日々の營み盡きず、
歡喜と感謝のこの信。
見よや、見よや。

3

光よ、來れ、自然の法に、
母校は大谷、今熊野、
　お、大谷、お、大谷、お、大谷、フレー。
げに眞實の救は盡きず、
定聚、不退のこの證。
見よや、見よや。

4

光よ、來れ、自由の森に、
母校は大谷、今熊野。
　お、大谷、お、大谷、お、大谷、フレー。
げに近代の知見は盡きず、
生々潑溂、この我等。
見よや、見よや。

昭和三・一一

櫻と欅

世田ケ谷櫻小學校校歌

草川信作曲

1

君おはします東京の、

西にあかるき櫻校、
櫻の花に包まれて、
我等の學ぶ櫻校。

2

庭に一本、樫の木と、
共に榮ゆる櫻校、
櫻の花に包まれて、
我等の學ぶ櫻校。

昭和三・一一

註　この一篇は同校の尋常科生徒遠山登代子の作を補修したものである。

愛の花輪

秋田縣立花輪高等女學校校歌

山田耕作作曲

1

十和田のみづうみ、
さやけき水の面、
さながら湛へむ、恒のこころ。
匂へよ、この愛、
（この愛）

2

少女、われら、
清らに學ばむ、恒のこころ。

鹿角のあをぞら、
あかるき山の尾、
親しく仰がむ、高き信。
　匂へよ、この愛、
（この愛）

3

少女、われら、
日に夜に願はむ、高き信。
林檎のくれなゐ、
すがしき白雪、
ゆかしみ守らむ、ここの花輪。
　匂へよ、この愛、
（この愛）

少女、われら、
新にかをらむ、ここの花輪。

昭和四・一・二四

水きよき野田

千葉縣立野田高等女學校校歌

山田耕作作曲

1

わが郷は惠まれし郷、
野はひろく、水きよき野田。
　きよらけき水に生ひ立ち、
　玉のごとわれら磨かむ。
　　われら磨かむ。

2

よき友よ、信あれ友、
禮ふかくいそしめよ、みな。
ほがらかに空はながめて、
つつましく共に學ばむ。
共に學ばむ。

3

木は柏、いつかしき冬、
霜しろく、地に傲るとも。
こころばえ堅く根ざして、
常に耐へ、常に忍ばむ。
常に忍ばむ。

4

わが郷は惠まれし郷、
空あをく水きよき野田。
きよらけき水に洗ひて、
塵ひとつ、われらとどめじ。
われらとどめじ。

昭和四・一・二四

法鼓ひびく

立正商業學校校歌

山田耕作作曲

1

法鼓ひびく、法鼓ひびく、

見よや空を、のぼれ谷山、
朝よ朝よ、けふも朗ら、
ら、らつ、らら。ら、らつ、らら。
立てよ、強く、息もかろく、
純に純に。
ら、立正、ら、立正、我等立てり。

2

法鼓ひびく、法鼓ひびく、
仰げ不二を、安し國は、
朝よ朝よ、雪は朗ら。
ら、らつ、らら、ら、らつ、らら。
生きよ、清く、思へ、高く、
常に常に。

ら、立正、ら、立正、我等立てり。

3

法鼓ひび〱、法鼓ひびく、
臨め海を、くだれ街へ、
朝よ朝よ、道は朗ら。
ら、らつ、らら、ら、らつ、らら。
行けよ、遠く、光れ、若く、
共に共に。
ら、立正、ら、立正、我等立てり。

〔昭和四・二・二〕

生活讚歌

父母の歌

山田耕作作曲

1

ちちのみの父は大空、
はてしなき雲の濃青よ。
　山よりも高きみめぐみ、
　現世のひかり、息の緒。

2

ははそばの母は大地、
かぎりなき草のみどりよ。
　海よりも深きみなさけ、
　人の子のあつきふところ。

3

父母は日とも露とも、
寄らし合ふ生みの御親よ。
はろばろし、愛し、尊とし、
産土のうましふるさと。

4

おほらかに酬もとめず、
子らゆゑにたづき知らずよ。
いつくしみ、まもり、乞禱み、
み命もかけてをします。

5

垂乳根ぞ、恙なくこそ、
時長く幸くおはせよ。
父見れば頭くだるを、
母思へば涙はしるを。

大正一四・一〇・二三

少女の歌

山田耕作 作曲

1

しののめの、われは野ばらよ、
すがすがし、にほひをさなし。
咲けよ、この少女ごころ、
かぎりなきやさしまごころ。

2

岩のまの、われは泉よ、
すがすがし、いのちつつまし。
秘めよ、この少女ごころ、
しみいづるふかきまごころ。

3

しらかばの、われは林よ、
すがすがし、ひびきあたらし、
守れ、この少女ごころ、
世に染まぬきよきまごころ。

4

夜の空の、われら昴よ、
すがすがし、ひとみうるはし、
燃えよ、この少女ごころ、
みどりなす星のまごころ。

昭和二・一〇・二四

幼年の歌

山田耕作作曲

1

みんなみんな、子供だ、僕たちは、
日の出だ、起きろよ、見ろ空を、
みどりだ、光だ、ら、ら、ら、ら、ら、
生れたばかりだ、僕たちは。

2

みんなみんな、子供だ、僕たちは、
嵐だ、かけろよ、野を、山を、
羽蟲だ、花粉だ、ら、ら、ら、ら、
地べたをはだしだ、僕たちは。

3

みんなみんな、子供だ、僕たちは、
芽ばえだ、のびろよ、すくすくと、
自由だ、素直だ、ら、ら、ら、ら、
仲よし小よしだ、僕たちは。

4

みんなみんな、子供だ、僕たちは、
男だ、きたへろ、あらがねを。
勇氣だ、力だ、ら、ら、ら、ら、
正しく立つのだ、僕たちは。

5

みんなみんな子供だ、僕たちは、
日の出だ、起きろよ、見ろ、空を、
らつぱだ、太鼓だ、ら、ら、ら、ら、
太陽の子供だ、僕たちは。

昭和二・一〇・二四

少年の歌

1

僕らは純です。地平よ、海よ、
僕らは翔けます、小鳥のやうに。
行け行け、この夢、霞を超えて、
光へ光へ、輝く星へ。
　少年です。少年です。フレー、フレー、少年です。

2

僕らは純です。緑よ、熱よ、
僕らは燃えます、豹の子のやうに、
見たまへ、この眼を、季節の風に、

躍つて躍つて、自由に育つ。
　少年です。少年です。フレー、フレー、少年です。

3

僕らは純です。雲よ、雪よ、
僕らは冴えます、野菜のやうに、
うてうて、この肩、正義は強い、
耐へて、忍んで、鍛へて生きる。
　少年です。少年です。フレー、フレー、少年です。

4

僕らは純です。レンズよ、珠よ、
僕らは鳴ります、お笛のやうに、
言葉に行ひ、ぴつたりあつて、

飾らず、作らず、愛情を磨く。
　少年です。少年です。フレー、フレー、少年です。

5

僕らは純です。祖國よ、母よ、
僕らは立ちます、日あしのやうに、
そだそだ、輝く世界だ、雲だ、
第二の時代はかならず若い。
　少年です。少年です。フレー、フレー、少年です。

昭和二・一〇・二六

輝く朝

山田耕作作曲

1

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、うしほの渦が巻く。
乘れよ、南風のあげ潮に、
汽笛が鳴る、
赤い蒸汽の汽笛が鳴る。

2

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、火の粉の華が咲く。
鍛へ、鎔爐の鍊鐵工、
風が鳴る、
革と、車輪の風が鳴る。

3

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、みどりの風が吹く。
鋤けよ、地平のはてまでも。
犂が鳴る、
二十馬力の犂が鳴る。

4

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、煙の森が立つ。
仰げ、摩天のビルヂング、

旗が鳴る、
旗が電波の息に鳴る。

5

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、ガードの山が積む。
吊れよ、起重機、ワイヤロープ、
鎚が鳴る、
電氣地行の鎚が鳴る。

6

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。

春だ、朱紅のブイが浮く。
潜れ、波間の潜水夫。
ゴムが鳴る、
管の空氣の張りが鳴る。

7

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、キネマのビラがちる。
架けよ、アンテナ、川蒸汽。
鐘が鳴る、
花は上野か、鐘が鳴る。

8

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、地獄の門があく。
穿て、下水のどてつ腹、
腕が鳴る、
そろふハンマアの腕が鳴る。

9

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、タンクの鳩が啼く。
笑へ、競馬の赤ガウン、
鞭が鳴る、
シルクハツトの鞭が鳴る。

10

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、雲霞の人が出る。
馳れ、青バス、ツウリング。
角が鳴る、
遠いボギーの角が鳴る。

11

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、ニュースの雲が湧く。
翔ろ、つぶての傳書鳩。

紙が鳴る、
朝は輪轉機の紙が鳴る。

12

朝は呼ぶ、
朝はかがやく聲が呼ぶ。
春だ、ラヂオの歌が飛ぶ。
光れ、プロペラ、落下傘。
空が鳴る、
明けて近づく空が鳴る。

昭和二・一〇・二六

註 この「輝く朝」十二首は連作體ではあるが、個々に獨立したものである。おのおの好むところに從つて、どれを拔いて歌つてもよい。必ずしも番號順に從はずともよいのである。

感謝の朝夕

家族うちよつて、朝餐と夕餐の席にて、つつましく、またなごやかに歌ふ同曲の歌二篇。

山田耕作作曲

朝のいのり

日は出でぬ。
つつましく對ふ朝餐に
小鳥なき、空は晴れたり。
幸あれや、けふのひと日、
榮あれ、過ぎしきのふも。
祈らまし、朝よ、ほがらに、
生きよ、子ら、いそしめよまた、
ああ、われら、いよよはげまむ。

夕のいのり

日は暮れぬ。
やすらけく對ふ夕餐に、
灯つき、空はにほへり。
幸ありき、けふのひと日、
榮あれ、あすもまどかに、
祈らまし、今宵、良夜、
なごめ、子ら、やすらへよ、また、
ああ、われら、いまぞ夢見む。

昭和二・一〇・二六

希望の海

1

沖のエー
沖の潮鳴枕にきけば、
　ヤットンヤッセ、ヤットンドッコイ、
風とエー
夢はまだ見ぬ空へ飛ぶ。
　セッセ、ヤッセ。

2

星よエー

星よ湧け湧け、夜ごとにかはれ、
　ヤットンヤッセ、ヤットンドッコイ、
明日のエー
海の夜明の霧もふれ。
　セッセ、ヤッセ。

3

雲よエー
雲よ立て立て、帆を照りかへせ、
　ヤットンヤッセ、ヤットンドッコイ、
涯にエー
眼路に黄金の島がある。
　セッセ、ヤッセ。

4

胸はエー
胸は高鳴る．帆は帆ははずむ、
ヤットンヤッセ、ヤットンドッコイ、
飛ばせエー
なんの黒潮．ひとはしり。
セッセ、ヤッセ。

昭和三・九・二四

朝日はのぼる

山田耕作作曲

1

生活萬歳．朝日はのぼる。

見ろ見ろ、あの赤、
あの旗雲を。
迎へよ、東を。
朝だ、朝だ。

2

生活萬歳、朝日はのぼる。
見ろ見ろ、あの赤、
あの清しさを。
生れたばかりだ、
朝だ、朝だ。

3

生活萬歳、朝日はのぼる。

見ろ見ろ、あの赤、
あの大きさを。
　響けよ、汽笛よ
　朝だ、朝だ。

4

生活萬歳、朝日はのぼる。
見ろ見ろ、あの赤、
あの輝きを。
　生きよや、人々、
　朝だ、朝だ。

5

生活萬歳、朝日はのぼる。

見ろ見ろ、あの赤、
あの若い日を。
　若かれ、日に日に。
　朝だ、朝だ。

昭和三・一〇・一九

日本は勝ちたり

——國際競技に於ける——

山田耕作作曲

1

日本は勝ちたり、立て立て、こぞりて、
感謝す、祖國よ、選手は勝ちたり。
揚れり、國旗は、またひるがへれり。
　ああ、日の丸、ああ、日の丸、

ああ、血湧き、肉をどる。

2

世界に勝ちたり、立て立て、こぞりて、
感謝す、祖國よ、記錄に勝ちたり。
響けり、國歌は、また鳴りわたれり。
ああ、君が代、ああ、君が代、
ああ、血湧き、肉をどる。

3

日本は勝ちたり、立て立て、こぞりて、
感謝す、祖國よ、我等は勝ちたり。
揚れり、國威は、また輝りかへれり。
ああ、日の丸、ああ、日の丸、

ああ、血湧き、肉をどる。

昭和三・一〇・一九

平凡人の歌

山田耕作作曲

1

淡々とあらむ、常に常に、
滞る無しよ、無しよ。
健全に、健全に、
寧ろ寧ろ、平凡に、平凡に。

2

朗々とあらむ、常に常に、
朝を夜を足れり、足れり。

眞實に、眞實に、
寧ろ寧ろ、平凡に、平凡に。

3
切々とあらむ、常に常に、
よく生きむ、愛し愛し。
清純に、清純に、
寧ろ寧ろ、平凡に、平凡に。

4
潑溂とあらむ、常に常に、
生活は樂し、樂し。
新鮮に、新鮮に、
寧ろ寧ろ、平凡に、平凡に。

5
寛々とあらむ、常に常に、
人たらむ、倦まず、急がず。
快活に、快活に、
寧ろ寧ろ、平凡に、平凡に。

昭和三・一〇・二五

空中行進曲

諸井三郎作曲

1
天上の旅客、旅客、
我等は身輕し、鳥のごとし。
峨々たる山岳、原始の雪谿、

なつかし、俯瞰し、樂し、樂し。
航路は輝く、空は涯無し。
飛べ、飛べ、飛行機、遮る物無し。
らら、りら、りら、らら、
りら、らら、樂し、樂し。

2

天上の旅客、旅客、
氣流は新らし、水のごとし。
綠の廣原、萬里の波濤、
遥けし、うつくし、樂し、樂し。
航路は輝く、空は涯無し。
飛べ、飛べ、飛行機、遮る物無し。
らら、りら、りら、らら、

りら、らら、樂し、樂し。

3

天上の旅客、旅客、
心は清けし、風のごとし。
眼下の虹の輪、とどろく密雲、
幽けし、すさまじ、樂し、樂し。
航路は輝く、空は涯無し。
飛べ、飛べ、飛行機、遮る物無し。
らら、りら、りら、らら、
りら、らら、樂し、樂し。

天上の旅客、旅客、

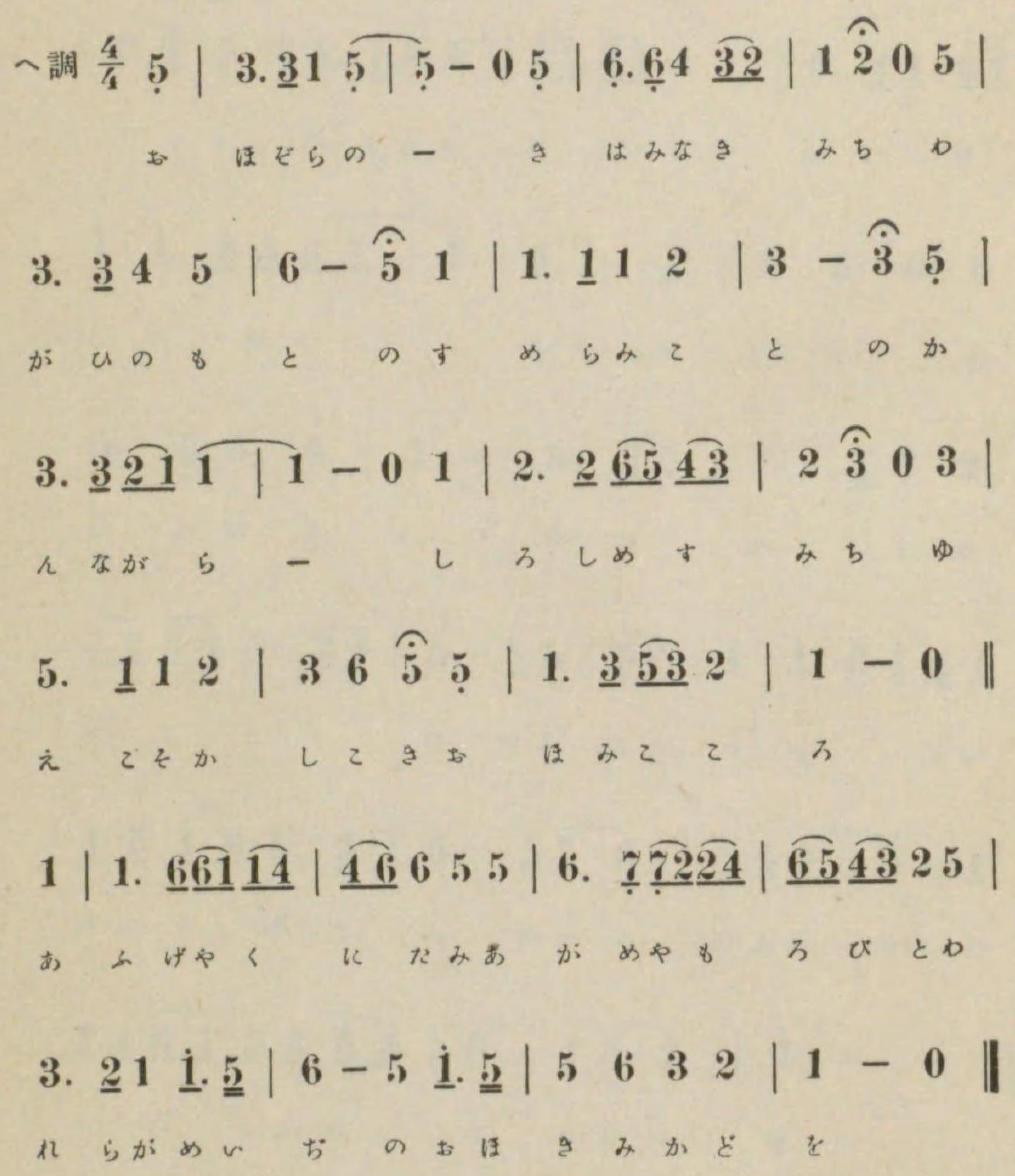
星座は眞近し、街のごとし。
世界の建築、未來の人文、
目ざまし、あかるし、樂し、樂し。
航路は輝く、空は涯無し。
飛べ、飛べ、飛行機、遮る物無し。
らら、りら、りら、らら、
りら、らら、らら、樂し、樂し。

昭和三・一・二

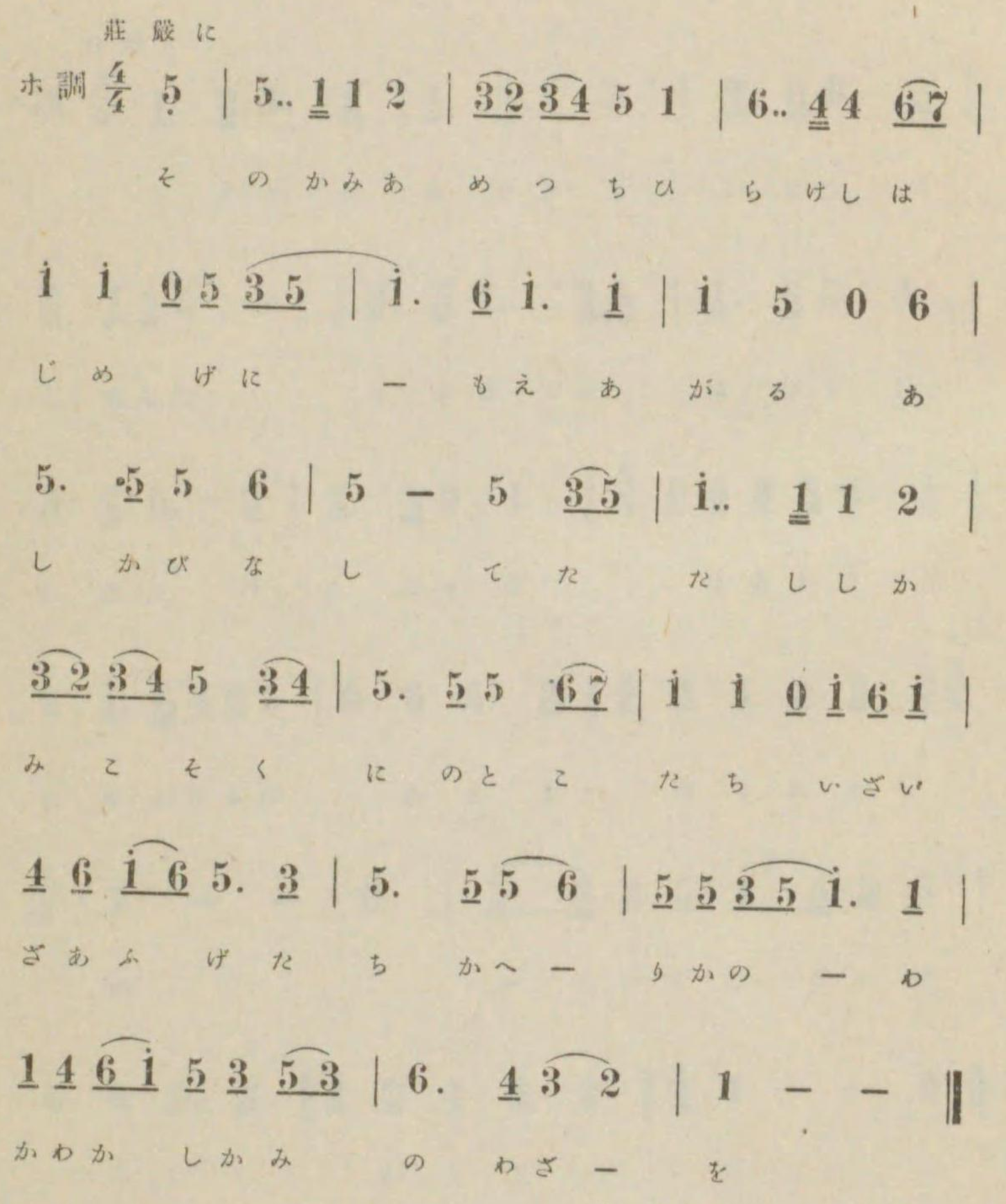
附録

（樂譜五曲）

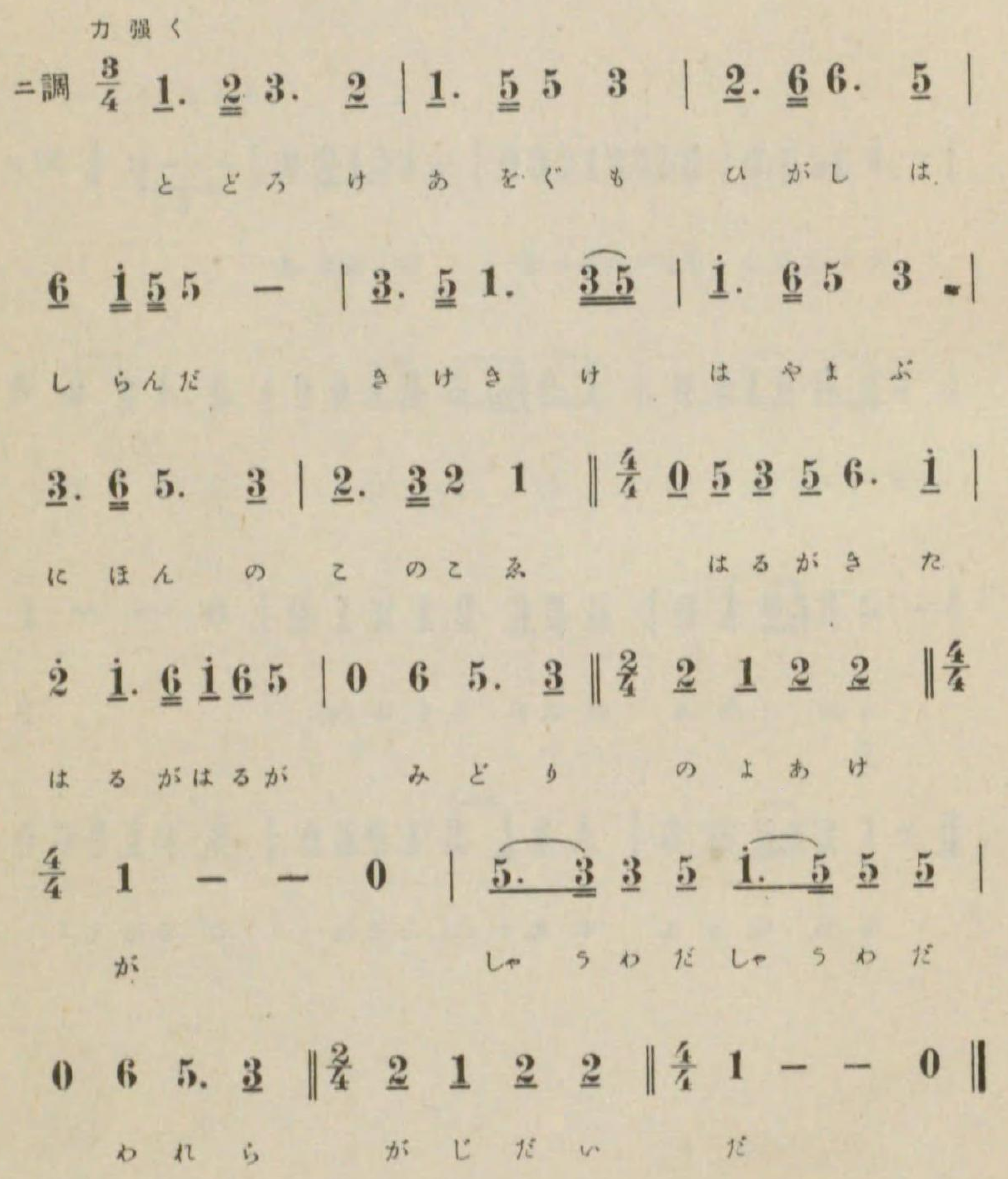
明治天皇頌歌


ヘ調
おほぞらの ー きはみなき みちわ
がひのもと のすめらみこ とのか
んながら ー しろしめす みちゆ
えこそか しこきお ほみここ ろ
あふげやく にだみあ がめやも ろびとわ
れらがめい ぢ のおほ きみかど を

建國歌

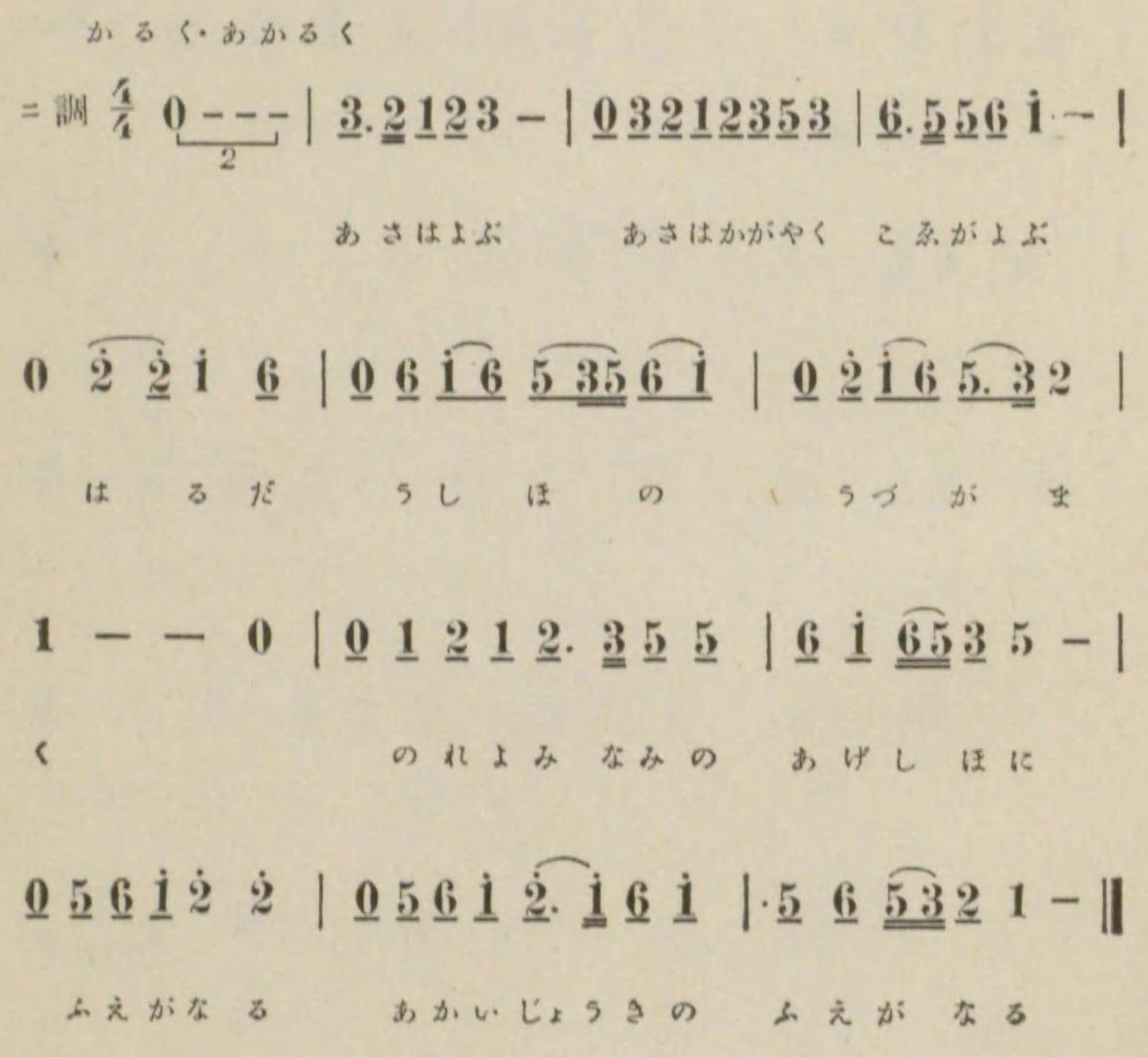

莊嚴に
ホ調
そのかみあめつちひらけしは
じめげにーもえあがるあ
しかびなしてたたししか
みこそくにのとこたちいざい
ざあふげたちかへーりかのーわ
かわかしかみのわざーを

昭和の日本



力強く
ニ調
と ど ろ け あ を ぐ も ひ が し は
し らんだ き け き け は や ま ぶ
に ほ ん の こ の こ ゑ は る が き た
は る が は る が み ど り の よ あ け
が しゃ う わ だ しゃ う わ だ
わ れ ら が じ だ い だ

輝く朝


かるく・あかるく
あさはよぶ　あさはかがやく　こゑがよぶ
はるだ　うしほの　うづがま
く　のれよみ　なみの　あげしほに
ふえがなる　あかいじょうきの　ふえがなる

空は青雲

元氣に力強く

ハ調 2/4 0 3 2 1 | 2 3 6 5 | 6 1̇ 1̇ 5 |

そらは あをぐも わしらは

6 1̇ 5 | 0 6 1̇ 5 | 2̇. 1̇5 5 |

わかい いはにこ だかの

3 5 3 2 | 1. 0 | 2̇. 1̇2̇ 1̇ |

あふぐよ だ さぅ だ さぅ だ

3 5 5 5 | 6 3̇2̇1̇ 2̇ | 5 0 3 |

すだちの わかだか だ い

2 1 2 | 0 3 5 | 2̇ 1̇ 5 |

まに かぜきる

0 3 5 | 6 7 | 1̇ − | 1̇ 0 ‖

たかのはだ ー

（福山製本）

昭和四年十月一日印刷
昭和四年十月廿日發行

改造文庫 第二部第六十八篇
作曲白秋國民歌謠集 定價二十錢

著者 北原白秋

發行者 山本三生 東京市芝區愛宕下町四ノ六

印刷者 杉山愛二 東京市牛込市谷加賀町區一ノ一二

版權所有

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地 改造社
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43) 自一一二一 至一一二四番

株式會社秀英舍印刷

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犧牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國內を震撼し、日日數千通の感謝狀が舞ひ込んだ、今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無產階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尚當時の宣言の徹底を期して玆に「改造文庫」を發刊せんとす。尚その內容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、內容の嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。
□此文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。
□此文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。
□表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜をも考慮に容れて之を示す。
□一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす、但、地圖附錄等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。
□表紙意匠中、1は十錢、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。
□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六

改造文庫第一部目錄

第一篇　富國論(上卷)　アダム・スミス著　(近刊)
第二篇　富國論(中卷)　アダム・スミス著　(近刊)
第三篇　富國論(下卷)　アダム・スミス著　(近刊)
第四篇　人口論　ロバート・マルサス著　(近刊)
第五篇　經濟學原理　デギト・リカアド著　(近刊)
第六篇　經濟學原理(上卷)　スチュアド・ミル著　(近刊)
第七篇　經濟學原理(下卷)　スチュアド・ミル著　(近刊)
第八篇　經濟學方法論　カール・メンガー著　(近刊)
第九篇　經濟學原理　チェボンス著　(近刊)
第一〇篇　社會主義の發展　エンゲルス著　堺利彥譯　1
第一一篇　マルキシズム認識論　デイツゲン著　石川準十郎譯　1
第一二篇　辯證法的唯物觀　デイツゲン著　山川均譯　2
第一三篇　哲學の實果　デイツゲン著　山川均譯　1
第一四篇　神と國家　バクーニン著　本莊可宗譯　1
第一五篇　婦人論　ベーベル著　山川菊榮譯　6
第一六篇　古代社會(上卷)　モルガン著　(近刊)
第一七篇　古代社會(下卷)　モルガン著　(近刊)
第一八篇　エミール(上卷)　ルーソウ著　內山賢次譯　4

第一九篇　エミール（下卷）　ルーソウ著　内山賢次譯　4
第二〇篇　國家論　オッペンハイマー著　廣島定吉譯　2
第二一篇　金融資本論　猪俣津南雄著　4
第二二篇　日本開化小史　田口卯吉著　2
第二三篇　日本經濟論　田口卯吉著　1
第二四篇　日本經濟學說の要領　經濟的帝國論　瀧本誠一著　2
第二五篇　日本商業史　横井時冬著　4
第二六篇　日本工業史　横井時冬著　4
第二七篇　經濟學の實際知識　高橋龜吉著　2
第二八篇　リッケルト論文集　リッケルト著　2
第二九篇　フッサール論文集　フッサール著　（近刊）
第三〇篇　女工哀史　細井和喜藏著　4
第三一篇　婦人解放論　スチュアド・ミル著　（近刊）
第三二篇　社會進化と婦人の地位　ラッパポート著　山川菊榮譯　2
第三三篇　共產主義小兒病　レーニン著　（近刊）
第三四篇　二十世紀初頭の農村問題　レーニン著　（近刊）
第三五篇　文學と革命　トロツキイ著　（近刊）
第三六篇　幸德秋水集　幸德秋水著　2
第三七篇　中江兆民集　中江兆民著　2
第三八篇　財產起源論　レヴインスキー著　貴島克己譯　1
第三九篇　組織論　レーニン著　鈴木厚譯　3
第四〇篇　三民主義　孫中山著　金井寛三譯　3
第四一篇　唯一者とその所有　マックス・スティルネル著　辻潤譯　6
第四二篇　世事見聞錄　武陽隱士著　本庄榮治郎校訂　（近刊）
第四三篇　全譯金融資本論　ヒルファディング著　林要譯　（近刊）
第四四篇　近世封建社會の研究　本庄榮治郎著　（近刊）
第四五篇　近世農村問題史論　本庄榮治郎著　（近刊）
第四六篇　マルクスの歷史、社會並に國家理論（上卷）　ハインリッヒ・クノー著　鳥海森谷濱島共譯　（近刊）
第四七篇　マルクスの歷史、社會並に國家理論（下卷）　ハインリッヒ・クノー著　鳥海森谷濱島共譯　（近刊）
第四八篇　マルキシズム國家觀　マックス・アドラー著　山本琴譯　5
第四九篇　マルクス主義經濟學　河上肇著　（近刊）

（以下續刊）

改造文庫第二部目録

第一篇　古事記　澤瀉久孝校訂（近刊）
第二篇　萬葉集（上卷）　折口信夫校訂（近刊）
第三篇　萬葉集（下卷）　折口信夫校訂（近刊）
第四篇　古今集　吉澤義則校註（近刊）
第五篇　新古今集　吉澤義則校註（近刊）
第六篇　新編源氏物語（上卷）　折口信夫校註（近刊）
第七篇　新編源氏物語（下卷）　折口信夫校註（近刊）
第八篇　枕草紙　山岸德平校訂（近刊）
第九篇　金槐集　幸田露伴校註（近刊）
第一〇篇　平家物語　（近刊）
第一一篇　雨月物語　山口剛校訂（近刊）
第一二篇　山家集　齋藤茂吉校註（近刊）
第一三篇　俳諧七部集　萩原蘿月校訂　3
第一四篇　蕪村七部集　萩原蘿月校訂　2
第一五篇　伊勢物語　久松潛一校訂（近刊）
第一六篇　神皇正統記　宮地直一校註　3
第一七篇　奥の細道 芭蕉翁文集　萩原蘿月校訂　3
第一八篇　曾根崎心中 女殺油地獄　黑木勘藏校註（近刊）
第一九篇　心中天島宴 冥途飛脚　黑木勘藏校註（近刊）
第二〇篇　國姓爺合戰　黑木勘藏校註（近刊）
第二一篇　槍權三重帷子 夕霧阿波鳴門　黑木勘藏校註（近刊）
第二二篇　心中重井筒 丹波與作　黑木勘藏校註（近刊）
第二三篇　山崎與次兵衞壽門松、心中宵庚申　黑木勘藏校註（近刊）
第二四篇　傾城反魂香　黑木勘藏校註（近刊）
第二五篇　淀鯉出世瀧德 長町女腹切　黑木勘藏校註（近刊）
第二六篇　堀川波鼓 博多小女郎波枕　黑木勘藏校註（近刊）
第二七篇　五十年忌歌念佛 大經師昔暦　黑木勘藏校註（近刊）
第二八篇　菅原傳受手習鑑 假名手本忠臣藏　黑木勘藏校註（近刊）
第二九篇　八百屋お七歌祭文 お染久松袂の白絞り　黑木勘藏校註（近刊）
第三〇篇　伊賀越道中双六 一谷嫩軍記　黑木勘藏校註（近刊）
第三一篇　大鏡　吉澤義則校註（近刊）
第三二篇　徒然草　吉澤義則校註（近刊）
第三三篇　日蓮上人集　（近刊）
第三四篇　親鸞上人集　（近刊）
第三五篇　北村透谷選集　島崎藤村編　1
第三六篇　樋口一葉選集　樋口一葉著　1
第三七篇　平凡　二葉亭主人著　1
第三八篇　子規俳話　正岡子規著　3

第三九篇	子規歌話	正岡子規著	（近刊）
第四〇篇	坊つちやん	夏目漱石著	2
第四一篇	草枕	夏目漱石著	2
第四二篇	それから	夏目漱石著	3
第四三篇	一握の砂 悲しき玩具	石川啄木著	2
第四四篇	我等の一團と彼 雲は天才である	石川啄木著	1
第四五篇	山陰土產その他	島崎藤村著	2
第四六篇	作曲白秋民謠集	北原白秋著	2
第四七篇	獄中記	オスカア・ワイルド著 神近市子譯	2
第四八篇	厭世家の誕生日	佐藤春夫著	1
第四九篇	日輪	橫光利一著	1
第五〇篇	勞働者の居ない船	葉山嘉樹著	1
第五一篇	海に生くる人々	葉山嘉樹著	2
第五二篇	小公子	バァネット著 若松賤子譯	2
第五三篇	ホワイト・ファング	堺利彥譯	3
第五四篇	はやり唄	小杉天外著	（近刊）
第五五篇	自選歌集 朝の螢	齋藤茂吉著	2
第五六篇	自選歌集 十年	島木赤彥著	（近刊）
第五七篇	自選歌集 川のほとり	古泉千樫著	2
第五八篇	自選歌集 松の芽	中村憲吉著	2
第五九篇	自選歌集 海やまのあひだ	釋迢空著	4
第六〇篇	自選歌集 立春	木下利玄著	2
第六一篇	自選歌集 花樫	北原白秋著	（近刊）
第六二篇	自選歌集 人間往來	與謝野晶子著	2
第六三篇	自選歌集 槻の木	窪田空穗著	2
第六四篇	自選歌集 野原の郭公	若山牧水著	2
第六五篇	自選歌集 原生林	前田夕暮著	3
第六六篇	自選歌集 空を仰ぐ	土岐善麿著	2
第六七篇	作曲白秋 童謠集	北原白秋著	2
第六八篇	作曲白秋 國民歌謠集	北原白秋著	2
第六九篇	作曲白秋 舞踊曲集	北原白秋著	2
第七〇篇	背德者	アンドレ・ジッド著 石川淳譯	2
第七一篇	チェホフ書簡集	內山賢次譯	5
第七六篇	愚庵歌集	齋藤茂吉編	（近刊）
第七七篇	芭蕉遺語集	荻原井泉水校訂	（近刊）
第七八篇	七番日記（上卷）	荻原井泉水校訂	（近刊）
第七九篇	七番日記（下卷）	荻原井泉水校訂	（近刊）
第八〇篇	おらが春	荻原井泉水校訂	（近刊）
第八二篇	新花つみ（蕪村日記）	荻原井泉水編	（近刊）
第八八篇	寡婦マルタ	エリイザ・オルゼシュコ著 清見陸郎譯	3

第八九篇 虚子句集 高濱虚子著（近刊）
第九〇篇 井泉水句集 荻原井泉水著 5
（以下續刊）

子規全集豫約募集

子規の藝術の如く眞に血を以て書かれ全人格を傾倒して綴られた大文學は何處に在る乎

芭蕉以來の俳聖、萬葉以降の歌聖、明治文壇の先驅者正岡子規の偉業は、實に日本文學史上燦として不滅の光輝を放つ。然り、子規の藝術は正しく明治文壇に於ける一大革命であり、燦然たる大正の文藝を育んだ搖籃であつた。文豪夏目漱石の藝術も亦子規の園圃より生れ、現代の俳句及び短歌にしてその源泉を子規に發せざるはない。明治文壇の空に輝く星辰は其數固より少くないが、併し巨大にして强力なるもの。子規を措いて何人があらうか。子規は斯く明治文壇の宗師たると共に、その人品極めて清節高風、强烈なる魅力を有つた人格者であつた、されば子規の創作の何れにも些の塵影なく些の虚飾なく些の技巧なく、赤裸の子規居士そのものの現はれてゐないのはない。「子規全集」十八巻は、日本文學中不朽の光輝であると共に、一代の覺者が人格の標章である。今や大衆の熾烈なる要求によつて、我社に於て普及版の刊行を見るに當り、われ等は眞に無上の歡喜を覺ゆ。偏に大衆の支持を俟つ。（内容次頁に在り）

『子規全集』豫約規定

□内容 全十八巻、總頁約八千頁。前版に漏れたる未發表の作品をも悉く收容す。

□體裁 本文四六判九ポイント組、一册紙數平均約四百頁乃至五百七十頁口繪は子規居士の寫眞、短册、原稿、書簡、草畫等、見返しは居士寫生畫中の逸品「靑梅」「櫻の實」色刷、裝幀清麗無比

□頒布方法 豫約者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ御申込み下さい。

□刊行期日 昭和四年七月第一回を刊行し爾後毎月一册づゝを刊行し昭和五年十二月を以て完結す。

□申込方法 先づ御申込みの際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最後の月の會費に充てるのでありますから、最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。尙申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません）

□會費 （一）毎月拂一册に付、壹圓。（二）一時拂全（十八巻）十七圓。

□送本料 會費の外に。送本料を申受けます。壹册に付十四錢。尙書留送付を希望せらるゝ向は別に書留料十錢を御增し下さい

□拂込方法 振替貯金又は郵便爲替でその月の一日迄に着金するよう御拂込み下さい。

子規全集總內容

日本文學の金字塔

第一卷　俳句全集（第一卷）
第二卷　俳句全集（第二卷）
第三卷　俳句全集（第三卷）
第四卷　俳論及俳話（上卷）
第五卷　俳論及俳話（下卷）
第六卷　歌論歌話及評論
第七卷　和歌、新體詩、漢詩
第八卷　小說、紀行、小品
第九卷　少年時代創作篇（上卷）
第十卷　少年時代創作篇（下卷）
第十一卷　隨筆（上卷）
第十二卷　隨筆（下卷）
第十三卷　編著（上卷）
第十四卷　編著（下卷）
第十五卷　書簡（上卷）
第十六卷　書簡（中卷）
第十七卷　書簡（下卷）
第十八卷　未發表作品及年譜、藏書目錄

萬代不朽の名著

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

569
142